

Title	我が国におけるソフトパワー戦略
Author(s)	原田, 大靖
Citation	年次学術大会講演要旨集, 25: 886-889
Issue Date	2010-10-09
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/9432
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

我が国におけるソフトパワー戦略

○原田 大靖

(東京理科大学専門職大学院 総合科学技術経営研究科 知的財産戦略専攻)

1. はじめに

我が愛する日本は、今この瞬間立ちすくんでいる。安全保障においては、冷戦構造のくびきから解放されるも、国際テロリズム、北朝鮮の核問題等々、新たな脅威が日本を包囲している。また、経済においては、中国やインドがその規模で日本を超えるのはもはや時間の問題となっており、これは我々日本人にとり、大変な精神的ストレスとなっている。それでは、明治の御代に非白人国家として初めて、かつ、驚異的な速さで近代化を成し遂げたあの勢い、また大東亜戦争後の焼け野原から一気に世界第二位の経済大国にまで登りつめたあのエネルギーは、もはや我が国には残されていないのか。

この点では、歴史上、英国やドイツに先例があろう。七つの海を支配した大英帝国の威光を見る影もなく失いながらも、まだ英国は死んでいない。それどころか、国際関係におけるそのプレゼンスたるや、未だに無視できないものがある。そこには、21世紀の多極化世界においても大国として生き残るための巧みな外交戦略であったり、“design or decline (デザインか、さもなくば衰退か)”の名の下に進められた産業振興政策であったり、また、英国国民に誇りを回復させた教育改革があったのである。また、第二次世界大戦においては、枢軸国として我が国と共に戦い、同じく敗戦を経験したドイツは、いまや周囲をすべて友好国とし、EUの中心的存在として生きる道を貫いている。

こうしてみると、日本もこの閉塞状況を打破できる道があるのではないかという希望がみえてくる。私は、この希望を、他国を圧倒するとてつもないソフトパワーに託したい。

2. ソフトパワー戦略

(1) ソフトパワーが求められる所以

我が国には、すべからく国益の最大化を図る現実的な外交・安全保障が求められる。

外交・安全保障に関する議論は、とかく過度の熱気を帯びがちであるが、「愛国的な熱情」の下、民族の誇りに血潮を滾らせたり、「高邁な理想主義」を掲げ、世界平和の到来を切願しても、外交資源には限りがある。すなわち、日本が、米国のようにスーパーパワーを持つ「超大国」として世界に君臨する可能性は極めて低いし、況してや「憲法9条の理念」が諸外国に受け入れられ、戦争や紛争が地を掃う日など未来永劫訪れない。

このように現実的な制約を無視した「願望」に拘泥していると、「現実の姿」と「あるべき姿」を混同してしまう。ザイン(存在)とゾルレン(当為)を取り違えたとき、国は現実を見失い、瓦解への方向へと動き出す。その結果は、国民の悲劇を招き、国際関係の安定にも寄与しない。

すなわち、外交・安全保障政策には、総合的な国益を踏まえた冷静な客観的姿勢が必要なのであって、戦前のような「大国(グレートパワー)志向」の単独主義はもはや現実的でない。今、我が国に求められている方針は、多国間交渉の中に自らのポジションを見出す「ミドルパワー志向」なのである。

ここに、経済力や軍事力等のハードパワー以外にも、文化や政策の魅力で世界に訴えるソフトパワー戦略が求められる所以がある。

(2) ソフトパワーとは何か

それでは、ここにいうソフトパワーとはいかなるものなのか。

ソフトパワーとは、米国が、冷戦には勝利したものの経済の低迷にあえぎ、米国国民の間に自国の覇

権が衰退するのではないかという不安感が広がっていた 1990 年に、国際政治学者ジョセフ・ナイが提唱した概念であり、軍事的・経済的な強制によってではなく、その国の魅力によって望む結果を得る能力のことをいう。

そもそも、国力とは、自国が望む結果になるように他国の行動を変える能力であり、その源泉としては、軍事力や経済力が特に重視されてきた。しかし、冷戦終結後、9.11 後、そしてリーマン・ショック後の世界において、米国は、こうした伝統的な意味での国力に限界を感じた。歴史学者ポール・ケネディは、外国に対する帝國的な過剰関与（imperial overstretch）と、慢性的な財政赤字によって、米国のダイヤモンドはキャパシティを超え、衰退へと向かうであろうとまで述べている。

そこで、近年、「ある国が、自国の望むことを他国も望むようにさせることによって、望ましい結果を得る能力」とでもいうべき新しい国力の形態が急速に重要性を増しつつあり、その源泉として、文化や価値、イデオロギーなどの魅力、また国際社会における政策課題（アジェンダ）設定能力が注目されている。

ナイは、前者のような伝統的な国力の形態をハードパワーと呼び、後者のような新しい国力の形態をソフトパワーと呼び、「不滅の大国」米国には、これらを駆使して、国際的指導力を発揮する責任があると説いた。

このソフトパワーの重要性は、ポスト 9.11 の米国において、一層高まった。9.11 テロの衝撃により自国のセキュリティへの不安感を強めた米国は、軍事力を中核とした単独行動主義に打って出た。すなわち、イラクや北朝鮮などの「悪の枢軸（Axis Of Evil）」との対決のためには、予防的的先制攻撃（preemptive attack）をも辞さないとする「ブッシュ・ドクトリン」を掲げ、イラク戦争においてこれを実践したのだ。これに対し、国際社会は対米懸念を強め、米国の評判が極端に下落した。この改善策として注目を集めたのが、ソフトパワーなのである。

それでは、実際、各国はこのソフトパワーを如何にして駆使しているのでしょうか。次に、欧米やアジア各国のケースを概観する。

3. 各国にみるソフトパワー戦略

(1) 米国

米国は極めて大きなソフトパワーをもっている。例えば、ラジオ・フリー・ヨーロッパを通じて米国の音楽やニュースを聞いていた鉄のカーテンの向こう側の若者や、天安門広場に「自由の女神」を模した「民生の女神」像を作り、民主化を要求した中国の学生、禁止されている米国のビデオや衛星放送を自宅でこっそりとみているイランの若者について考えてみればよい。

しかし、アメリカの社会、価値観、文化を拒否する根深い反米感情もまた存在する。反米感情は、古くはヨーロッパにあらわれ、英国の小説家チャールズ・ディケンズは、米国を「騒々しく騒ぎ立てる詐欺師とペテン師と愚か者の集まり」としかみていなかった。一方で、最近の反米感情の高まりは、米国の安全保障政策、なかんずく混迷を極めたイラク戦争に起因するものである。この点、政策に対する感情は、文化や価値観に対する感情よりも変動が大きいと、また別の政策によってこの反米感情を和らげることも可能である。2009 年 4 月、オバマ大統領がプラハで行った「核なき世界」へ具体的措置をとるとの表明は、まさしく最近の反米感情への対策の一つといえよう。

(2) ソ連・ロシア

冷戦時代、米国にとり明白かつ現実の敵国であったソ連は、共産主義の魅力を世界に伝えるため、大規模な宣伝活動を展開した。例えば、人工衛星スプートニクの打ち上げ成功や、オリンピックでの膨大な金メダル獲得数、世界から高く評価されたボリショイ・バレエ団や各地の交響楽団など、科学技術、スポーツ、音楽の分野ではソ連文化は魅力的であったかもしれない。

しかし、いくら文化の魅力を訴えても、実際のソ連社会は暗く貧しいものであったという矛盾のために、ソ連は冷戦時代、ソフトパワーの面では米国と対峙することはできなかった。

冷戦崩壊後、現在のロシアは、あまり積極的にソフトパワーを発信しているようにはみえない。もっとも、「強いロシア」再建を掲げ、国民に誇りと自信を取り戻させたプーチン元大統領の政策には見習うべき点も多々ある。国民が自国を愛し、誇りとすることは、ソフトパワーの発信依然の問題であるか

らだ。

(3) ヨーロッパ

ヨーロッパ各国は、美術、音楽、文学、デザイン、ファッション、料理といった文化面や、環境問題、人権、銃規制などの政策面において、強いソフトパワーを有している。例えば、外国人訪問者数はフランスが 7930 万人で 1 位であり、2 位の米国を大きく引き離している。また、マレーシアのマハティール前首相は、環境と人権を重視する姿勢を「ヨーロッパの価値観」だと述べている。このように、ヨーロッパは独自のソフトパワーを有しているが、各国が単独で米国に対抗できるほどのソフトパワーは有していない。

しかし、ヨーロッパ全体、すなわち、EU でならば米国に対抗できる。いや、米国のソフトパワーをはるかに凌ぐかもしれない。すでに、貿易、金融、農業政策で統一を果たし、人権と司法の分野でもほぼ統一に近付いている EU は、2009 年には EU 大統領の職を新設し、現在は欧州憲法条約の制定に向けて調整がなされている。そして、現在も拡大しつつあるが、その拡大に当然武力は使われていない。EU はその理念や価値観によって、多くの民族を魅了し、版図を広げているのだ。これこそが、EU の恐るべきソフトパワーなのである。

(4) アジア

今や世界の成長センターたるアジア諸国にも、我が国含め、素晴らしいソフトパワーの源泉が多々ある。

韓国は、朝鮮戦争で政治、経済、文化のすべてが破壊され、復興するのに 60 年もかかった。そのうち、最初の 40 年は、軍事独裁政権として、まさに国家として「生存すること」のみが最重要課題であった。しかし、その後、1987 年の盧泰愚大統領による民主化宣言以降、短期間で民主化、産業化を成し遂げ、経済的にも再生した。この経済再生の原動力の一つとなったのが、1990 年代から力を入れ始めた文化産業である。今では、韓国大衆文化の流行、所謂「韓流」が、日本はじめアジア各国に進出している。

中国の文化産業は、政府、すなわち中国共産党の統制下により行われていることから、その魅力には限度がある。現時点で、米国やヨーロッパのソフトパワーの源泉に比べ、中国のそれは規模、コンテンツ等で遠く及ばないが、その将来性には一縷の希望がみえる。もっとも、文化大革命において、2000 万人もの人民を粛清し、中国古来の文化、社会、思想等をすべて破壊した共産党が、いまや経済発展のために、文化の力を利用しようというのは、なんとも皮肉といえよう。また、地球上からソフトパワーの源泉たる文化が今、消えつつあることを忘れてはならない。今現在も進行しつつあるチベットやウイグルなどの少数民族文化の破壊活動を止めることこそが、中国にはまずもって求められている。

4. 日本復活のための 4 つの提言

以上のように、各国のソフトパワー戦略は、非常に急速に、かつしたたかに展開されており、これらは我々日本人にとり、大いなる脅威として映る。今こそ、この脅威を克服し、日本国家を飛翔させるためのソフトパワー戦略を考えなければならない。そのためには、あらゆるイデオロギーや学術領域、常識を超えた中長期的な新戦略こそが何よりも重要であり、国家としてのアイデンティティを重視しつつも、ボーダレス化に向き合うためのバランス感覚が問われている。その前途には、日本と、日本国民が登るべき高らかにそびえる峰が見え、またこれにかかる雲も見えている。明確な答えなき永遠の問いなのである。

しかし、私は以下に掲げる 4 つの提言により、かの高い峰にかかる白雲を目指すことができるのだと信じる。

(1) 外交 — 外交を通じたソフトパワーの発信により、「自由と繁栄の回廊」を形成する。

まずもって、官民間わず、外交を通じたソフトパワーの発信が求められる。

中東に石油資源の 9 割を依存している我が国にとり、外交の要は、すべからく中東から南アジア、東

南アジア、極東に至るシーレーンの確保にある。現に、この地域では、自衛隊やNPOによる災害復興支援や、法整備支援事業、中東における和解促進の努力など、我が国のソフトパワーが広まっている。こうした活動を絶えず続け、日本は広くアジア、太平洋、中東、アフリカ等々の地域秩序にコミットメントするという明確な意思を示すことで、日本外交の地平を広げなければならない。

(2) 安全保障 — 安全保障があつてのソフトパワーである。国土防衛に万全を期す。

これまで、ソフトパワーの重要性を述べてきたが、当然、これだけで日本の平和と繁栄が確保されるものではない。北朝鮮問題や、不気味に台頭する中国の軍事力、またテロとの戦いなど、我が国の安全保障環境は極めて不安定なのである。ここにすべからず、我が国にも国土防衛に万全を期すためのハードパワーが求められる所以がある。

我が国に求められるハードパワーとは、煎じつめたところ、自衛隊の防衛力と在日米軍のプレゼンス、そして米国の「核の傘」にあるという抑止力の3点である。

安全保障なきソフトパワー戦略はありえない。今我が国に求められているのは、ハードパワーとソフトパワーを賢く使い分ける「スマートパワー戦略」なのである。

(3) 教育 — 我が国のソフトパワーの源泉を涵養せしめる。

我が国のソフトパワーの源泉は、連綿たる文化伝統や、世界から「クールジャパン」と称賛されるアニメ、マンガ等々、その魅力には事欠かない。しかし、この魅力を日本人自身が認識し、誇りとしているのであろうか。

我が国には、肇国以来、独自の文化伝統があり、日本人の繊細な美意識や、精華たる武士道が、あたかもあざなえる縄の如き、連綿たる集積がある。その末端に連なる今、これを承け継ぐ国民の歴史的使命は誠に甚大である。この使命を果たして初めて、日本文化が花開き、世界へと飛翔していくのだ。

(4) 憲法改正 — 独立国家としての尊厳を取り戻す。

防衛問題の根幹は憲法9条にあり、知的財産権や環境権、プライバシー権といった新たなる国民の権利の規定は重大な課題である。今こそ、憲法改正に関する国民的議論を尽くし、独立国家としての尊厳を取り戻さなければならない。

5. おわりに

冒頭、日本は今立ちすくんでいると言ったが、今一度問いたい。開国後、西欧列強に^{おのの}慄いていた近代の日本くらい、将来が悲惨なのか。戦後の焼け野原に絶望していた頃くらい、将来を暗いと思わなければならない状態なのか。私はそうは思わない。

麻生太郎前総理大臣はその著書で次のように述べている。

「日本人のエネルギーはとてつもないものだ。日本はこれから必ずよくなる。日本はとてつもない国なのだ」——。

私はいま、この言葉を思い出している。